

東 牧 小 苦

# 特色のあるロボットリハビリ展開

## 研究チームで稼働の均等化調整

苫小牧市の苫小牧東病院（橋本洋一理事長・260床）は、リハビリロボットを複数導入。それぞれのロボットに研究チームを設けることで、スタッフへの使用方法の訴求や稼働数の均等化を行い、他施設と差別化を図ったりリハビリを実践して地域医療を担っている。

同病院は一般、回復期 展開するため音楽療法 リハビリテーション、緩 や園芸療法を実施しており、10年前からは積極的にロボットを導入。歩行 唯一、回復期リハビリは アシスト装置や足首アシスト装置、ロボットスーツ、可動式免荷装置など

特色のあるリハビリを 下肢に特化したものを中



認知機能などの訓練になるMRシステム

心に、上肢リハビリ装置、ドライビングシミュレーターなど活用している。4年前に導入した脳卒中などの高次脳機能障害のリハビリに利用しているMRシステムは、患者がホロレンズを装着すると現実空間の中に仮想空間が表れる作りとなっており、道内での導入施設はまだ少ない。

部屋の各所に数字が映し出され1から順に探しながら触れて消していったり、花が表れ決まった色のものだけを触ることで点数やタイムを競うことができ、ゲーム感覚で楽しみながら作業療法や記憶障害の訓練を行うことができる。

毎日のリハビリを自発的に希望する患者もあり、注意力が増して食事を上手に食べることで

きるようになったという効果が出ている。

リハビリテーション部には100人ほどのスタッフが在籍し、それぞれが下肢、上肢、高次脳栄養、嚥下、ポジションといった研究チームに所属している。

ロボットの特性に応じて、歩行アシスト装置や足首アシスト装置は下肢

チーム、上肢リハビリ装置は上肢チーム、MRシステムは高次脳チームのメンバーが関わり、さまざまなロボット研究チームを構成している。

各ロボット研究チームは、スタッフへのロボットの使用方法の訴求や稼働実績、活用内容、活用を増やすための方法などを検証し、定期的に全てのロボット研究チームスタッフが集まりカンファレンスを実施している。ロボット間で稼働に

ばらつきが出ないように調整し、全てのロボットに意義のある利用を促している。

ロボットの利点として成田伸夫作業療法士は

「正確性が高く、同じ動きを疲れることなく長時間続けることができる。スタッフが直接手を触れないので、患者が主体的にリハビリを行っている」という心理効果も高い」と話す。下肢ロボットの活用で歩けるようになった患者も多く、退院時にロボットと写真撮影する患者もいるという。

鈴木則彦事務局長は「稼働しているロボットの更新の確に見極め、今後も特色のあるリハビリを充実させていきたい」と力を込める。